

額縁に守られて

——イタリア・ノヴェッラにおけるエロスの開花——

米 山 喜 晟*

第一章 エロスの開花を検証するための尺度について

私は論文「額縁は『デカメロン』の完成にいかに関与したか」¹⁾において、額縁が有している他人の口を通して物語を語らせるという設定がもたらした特性、つまり私が「他人性」と呼んでいる特性が、架空の他人への責任転嫁という方法によって、『デカメロン』執筆当時のボッカッチョを表現の際の抑圧や警戒心から解放し、その分表現の自由を強化した結果、彼が『デカメロン』の中で聖職者と教会を批判・嘲笑し、さらにエロスに関する大胆な表現を多数収めることができたのではないか、という仮説を提示した。

以上で大胆な表現として挙げた二つの例の内、19世紀の批評家デ・サンクティスらによって高く評価された聖職者と教会の風刺や嘲笑²⁾に関しては、ボッカッチョがその後自ら聖職者の仲間入りしたという事実もあり、また彼が作品の中で個々の聖職者を批判することはあっても、キリスト教はもちろんカトリック教会やその修道院自体を批判していたわけではないので、今日ではその風刺・嘲笑が有する意味が、過去の一時期ほど重視されているとは言えそうにない³⁾。これはボッカッチョの信仰や当時の教会

* 本学文学部

キーワード：『デカメロン』、額縁、他人性、性行為関連度、性行為主要関連度

の状況など多くの事柄と絡みあった複雑な問題なので、本論以外の別の機会に取り上げることにする。

こうして額縁の効果として私達に残されたのは、『デカメロン』に見られるエロスの表現をめぐる問題であるが、前論文では単純に、『デカメロン』の中の多くのノヴェツラで性行為が扱われていることを理由に挙げて、額縁の他人性という特性の効果が発揮されていると論じた。さらに本論では、この問題を性行為関連度および性行為主要関連度という二つの尺度を用いて考察することにした。厳密さを求めたために固い表現となったが、要するに第二章以下で扱う性行為関連度とは、あるノヴェツラ集あるいはそれに準じる作品の中で、全体に対してどれだけの割合のノヴェツラ、もしくはそれに準ずる一まとまりの散文で、性行為が扱われているか、という比率を示す数字である。また性行為が、どの程度の比率で物語の主要な要素となっているかを示したのが、第三章以下で扱う性行為主要関連度である。ただしここでいう性行為とは、精神的な恋愛感情の有無には関係なく、一方的なレイプなどをも含めた生物的な性の交わりを目標として行われる、あらゆる男女あるいは雌雄の行動を意味するものである。そこには性の交わりを成し遂げた場合も、未遂に終わった場合も含めることとし、ごく稀に見られる同性間の場合をも含む。勿論エロスのすべてが上述した性行為に関係するものではなく、したがってこの尺度、とりわけ性行為関連度は、その作品のエロティシズムの濃度を正確に示すものではない。あるいは他人の妻の裸体の寝姿を盗み見る『デカメロン』Ⅱ-9のように、性行為が全く行われていない場合でもエロティシズムが濃厚な作品は存在し得るし、逆に動物説話の雌雄の性行為などのように、エロティシズムを全く感じさせない性行為もあり得るからである。だがその反面、ノヴェツラに描かれた性行為の表現が、エロティシズムの重要な源泉であることは確かなので、エロティシズムの濃度を予測するための一つの指標として、

額縁に守られて

これらの数字がある程度の有効性を持っていることは否定できないはずである。

ノヴェッラの中で表現された性行為というテーマは、少なくとも私の知るかぎり、イタリア・ノヴェッラの専門的な研究者によって深く論じられているとは言えない⁴⁾。しかし中世からルネサンス期にかけて、イタリア・ノヴェッラ一般と、そしてその代表的な傑作である『デカメロン』が、しばしば性行為を大胆に表現してきたということは、何人も否定し得ない事実である。また私は自分の実感に基づいて、イタリア・ノヴェッラが今日まで多くの読者を得て来た重大な理由の一つは、それが大胆に性行為を語っている点にあるのではないかと推測しているのであるが、恐らくそのことが余りにも明白であるためか、逆にそのことを厳密に証明することが困難であるためか、意外にもそのことを明確に指摘したノヴェッラ研究者の文章を読んだ記憶がない。しかし私のこの推測は、やはりかなり真相に近いのではないかと思われる。したがって私に言わせると、従来のイタリア・ノヴェッラ研究には大きな欠落があったように思われてならない。私はフロイトの熱心な読者ではないが、ここにはフロイトらによって指摘された、キリスト教文明による性の表現に対する抑圧の顕著な一例が認められるのではないだろうか⁵⁾。

従来こうした問題が直視されことがなかったことを示す証拠の一つは、この問題に関して基礎的な数的把握すらまだ行われていない、という事実である。たとえば各々のノヴェッラ集において、私が先に性行為関連度および性行為主要関連度として記した比率を明記した資料を、私は見た記憶がないのである。しかし作品中の多数のノヴェッラで性行為が語られている作品と、ごく少数のノヴェッラでしか語られていない作品とでは、その性格が大いに異なることは明白である。勿論数字がすべてではないけれども、一応ある作品がどの程度性行為と関わっているかを示す指標があれば、

その作品の性格を知るために確実に有効なはずである。特に複数の作品の比較を行う場合には参考になるに違いない。

これらの数字を提案した直接の理由は、前論文で私が行った記述の不備を補い、さらに厳密に論じるためである。すでに冒頭で記した通り、私は前論文において額縁の他人性による責任転嫁の効果によって、ボッカッチョが多くのノヴェッラで大胆に性行為を物語ったのではないかという仮説を提起し、それを実証するために『デカメロン』の中の性行為を扱っているノヴェッラ46篇の番号を列挙して、その数が全体の半数近くに及んでいるという事実を示したことで、自説を裏付けたつもりであった⁶⁾。しかしその例証が十分論理的に有効なものであったとは言えない。たしかに46篇は全100篇の半数近い数字ではあるが、それが当時の他のノヴェッラ集に比して大きかったか否かが示されていないからである。前論文におけるこの部分の主張を裏付けるためには、当時のイタリア・ノヴェッラがどの程度の頻度で性行為を語っていたか、を示すことが必要だったのである。そのためには、『デカメロン』とそれ以前の作品の性行為関連度を比較する必要があった。

今記した目的のためには、まず何よりも『デカメロン』以前のイタリア・ノヴェッラの代表作である、『ノヴェッリーノ』とその原型と言われる『ウル・ノヴェッリーノ』について性行為関連度を調べるべきであろう。また参考のためにノヴェッラを初めてイタリアに伝えたとされている『七賢人の書』や『賢者の教え』に関しても同様の作業が必要である。こうして『デカメロン』以前の状況を明らかにすることで、『デカメロン』自体の性行為の表現を再検討し、そこにいかなる量的および質的な変化が生じていたかを、改めて吟味することが可能になるはずである。このような比較対照の作業の後に初めて、前論文で記したような他人性の効果について何らかの判断を下すことが可能になるだろう。

額縁に守られて

そこで本論は、まず第二章で『デカメロン』以前のイタリア・ノヴェッラおよび外来の説話集について性行為関連度に基づく検討を行いつつ、あわせてこの時点における額縁の効果をも検討する。続く第三章では『デカメロン』自体の性行為関連度を明らかにして、それ以前との量的および質的な変化を調べるとともに、ボッカッチョが発明した『デカメロン』式額縁の効果をも改めて考察する。そこで初めて、はたして前論文で推測したような大きな発展、たとえばエロスの開花と呼べるような出来事が発生していたのかどうかを検証し得るであろう。さらに第四章では、もしもそうした変化が生じていたとすれば、そのことがどうした経過を経ておこった事柄であるのかを調べ、その経過について一応の説明を与えておくことにしたい。

第二章 『デカメロン』以前のイタリア・ノヴェッラに現れた性行為

イタリアではフランス等に比して、中世末期のある時期まで、文学活動が著しく低調であった、と言われている¹⁾。詩の分野では13世紀の前半に、南仏のトゥルバドゥールの影響を受けて、パレルモのフェデリーコ二世の宮廷にシチリア派が誕生し、やがてポローニャやトスカーナに伝播し、ついにはダンテも属していた清新体派につながる²⁾。その一方でアッシジのフランチェスコ修道会などに刺激された宗教詩などが生まれているが、散文ではさらに遅れて、各都市の年代記類や説教集を除くと見るべき作品は少なく、13世紀後半に出現した『ノヴェッリーノ』は奇跡のような輝きを放っている。しかし実は今日私たちが読んでいる『ノヴェッリーノ』は、その原型が何人もの手で改作された後世の作品であり、今日の形に完成されたのは、何とようやく16世紀のことだったことが明らかにされている³⁾。その真の原型がいかなるものであったかは、残念ながら今日の私たちには知るよしもないが、近年ほぼ原型に近いと思われる『ウル・ノヴェッリー

ノ』がサレルノ書店より、完成した後の『ノヴェッリーノ』と併せて刊行されたので、両者の間の違いはある程度把握することができる⁴⁾。

そこで私は前章で提案した性行為関連度という概念を用いて、まずそれらの作品を調査してみることにする。それによって『デカメロン』出現以前のイタリア・ノヴェッラの性行為との関わり具合がある程度把握できるはずである。確認のために、まず性行為と関わりのある作品を、不倫行為の場合は*、未遂に終わった場合は☆、聖職者が関係している場合は◎、レイプはR、わずか一部だけが関与している場合は§などと、それぞれの内容の特性を示す記号を添えて以下に列挙する。ただし性行為の関与の有無およびそれぞれの項目は必ずしも客観的に判断し難く、ある程度恣意的に判定せざるを得ないことをあらかじめお断りしておく。

『ノヴェッリーノ』の場合（全100篇）

3 §, 15*, 36 §, 47*☆, 49*, 51R, 54◎, 57, 62*, 65*☆, 77*, 86, 87*☆, 88* §, 99（小計15篇）したがって、このリストによると、『ノヴェッリーノ』の性行為関連度は15となる。

以上はあくまで前章で記した性行為を内容の一部に含むノヴェッラのみを数えた数であり、それ以外にも男女関係を扱った作品はいくつか存在する。性行為抜きに恋愛や男女の感情を扱ったものに、14, 28, 42, 47, 60, 64, 65, 80, 82, 結婚や夫婦が語られているものに21, 26, 59, 娼婦を扱ったものに78などがある。ただしすでに記したとおり、ある恋愛における性行為の有無を判別することは困難で、解釈によって多少の誤差が生じることがあり得る。また全作品数に関しても、後に見るとおりその決定は決して容易ではなく、例えば作品2は、『ウル・ノヴェッリーノ』の二つの作品を組み合わせたもので、時間的にも異なった別のエピソードなので⁵⁾,

額縁に守られて

2つの作品として計上し、増えた分を全作品数に加えるという算出方法があるかも知れない。だがそれでは余りにも作業が繁雑になり、解釈による誤差が生じやすい上に、これはあくまで一つの目安としての数字なので、この場合には各ノヴェッタを一まとまりの散文と見なして、全作品数をノヴェッタの総数100と一致させておくことにする。後で見るとおり、『デカメロン』のように額縁がついている作品では、決してこうした数え方は許されない。しかしそうした限界をあらかじめ考慮しておけば、イタリア・ルネサンス期のノヴェッタ集のような、多種多様な短編集を比較する場合、性行為関連度および性行為主要関連度という指標は、作品の性格を知るために一定の有効な手掛かりとなるはずである。続いて『ノヴェッリーノ』の原型だったとされる『ウル・ノヴェッリーノ』のそれを調べて見よう。

『ウル・ノヴェッリーノ』の場合（全85篇）

4 § *, 20, 21 *, 33 *, 49 * ☆, 57 §, 84 *（小計7篇）

性行為関連度は8.24となる。

その他に性行為抜きの恋愛や男女の問題に触れたものとして、19, 34, 37, 49, 72, 79, 結婚や夫婦をが語られているものとして、32, 35, 68などが見られる。この場合にも全作品数の数え方は『ノヴェッリーノ』に準じているが、この作品の性行為関連度は、全100篇の『ノヴェッリーノ』と比較するためパーセントに直すと、8.24となり、何と『ノヴェッリーノ』のそれのおよそ半分になってしまう。すなわち『ウル・ノヴェッリーノ』から『ノヴェッリーノ』へと改作されていく間に、性行為関連度は約2倍増大していたのである。さらに性行為にほんのわずか触れているだけの§印付きが、『ノヴェッリーノ』では16篇中の3篇であるのに対し、『ウル・ノヴェッリーノ』では、わずか7篇中に2篇含まれているのである。とい

うことは、イタリア・ノヴェッラの原点と見なし得る『ウル・ノヴェッリーノ』においては、性行為に関する記述が、『ノヴェッリーノ』に比しても著しく乏しく、それが後世に今日の『ノヴェッリーノ』へと改作されていく過程で倍増したことを意味しているのである。総数がわずか15篇（17.65%）しか増えていない改作の過程で、性行為関連度だけは約2倍に増えたということは重大な変化であり、おそらく両作品の間に見られる最も大きな違いの一つと言っても差し支えないであろう。これは両作品が書かれた時代の心性の差を推測させる差だと言えるのではないだろうか。またこのように性行為関連度、すなわちどれだけの割合のノヴェッラで性行為に触れているかを比較するだけで、二つの作品の性格の違いが鮮明に現れるという事実をも、あわせて確認しておきたい。

しかしそれと同時に、『ウル・ノヴェッリーノ』と比較した場合には約2倍にその度数が高まったはずの『ノヴェッリーノ』においても、全100篇の内のわずか15篇、すなわち2割にも満たぬ作品でしか性行為が描かれていなかったという事実は重要である。すでに記したとおり『デカメロン』では46篇のノヴェッラで性行為が語られていた。勿論『デカメロン』には額縁が付いているため、この数字がそのまま性行為関連度ではなく、次章で見るとおり性行為関連度はそれよりもかなり小さいのだが、それにもかかわらず、単純にノヴェッラの作品数だけを比較した場合には、3倍以上の作品が性行為に関連していて、しかもそのほとんどが§印とは無縁な関連の仕方であるという事実、すなわちイタリア・ノヴェッラが、『ノヴェッリーノ』から『デカメロン』へと発展した時、性行為に関する関心が一気に高まった事実は否定できないことを確認しておきたい。このことはそれと同時に、前論文で私が検証抜きで推測しておいたとおり、『デカメロン』ではそれ以前の時代のイタリアのノヴェッラ集よりもはるかに頻繁に性行為が表現されていたことを意味している。両者の違いはなぜ生じたの

額縁に守られて

だろうか。勿論それらの作品が書かれた時代の違いなど、さまざまな他の原因も考えられるが、具体的に作品に即して考察する場合、『デカメロン』には『ノヴェッリーノ』にも『ウル・ノヴェッリーノ』にもついてなかった額縁がついていたという事実は重要である。その事実は、額縁がもたらした他人の口を通してノヴェツラを語らせるという設定が、作者であるポッカッチョにかつてなき自由な表現を可能にしたという推測と矛盾しないことを、あわせて確認しておきたい。

さらにもう一つ改めて注目しなければならないことは、『ウル・ノヴェッリーノ』という作品の性行為関連度が、決して性行為関連度がそれほど高いとは言えない『ノヴェッリーノ』の約2分の1という低さである。これがいかに低い数字であるかを知るには、『ウル・ノヴェッリーノ』の誕生以前にイタリアにも伝播してさまざまなバージョンが生まれていた、中世で最もよく知られたラテン語のノヴェツラ集『七賢人の書』と比較すれば明らかである。幸いラテン語から中世のイタリア語に翻訳された版の一つであるカッペッリ版が鳥居正雄氏の手で邦訳されている⁶⁾ので、まず以下でそれを通して、イタリア語に翻訳された『七賢人の書』の性行為関連度を測定する。

カッペッリ版の『セッテ・サーヴィの書』、序文+14話=全15話（結びは第14話の一部）序文*☆（義母の誘惑）、3*§、5☆、7*、9*、13*、14（小計8話）したがって性行為関連度は46.67

この作品は義理の息子を誘惑しようとして失敗した王妃が、逆に王子に誘惑されたと訴えて処刑を求めたため、7人の学者が王にその処刑を止めさせようとして物語を語ると、妃もそれに対抗して物語を語り、最後にそれまで占星術の教えにしたがって沈黙していた王子が物語を語った結果、

妃がその勧告によって火あぶりにされるという、枠組全体が物語となっている、いわゆる入れ子式の構造の額縁を持っている。新しい男と結婚するため、死んだ夫の遺体を傷つける未亡人を扱った11なども、女の側から見ると☆印に近いが、性行為には言及されていないので除く。先に見た二つの作品に較べて、これは何という高い度数であろうか。じつはこの作品には、西村正身氏によるラテン語版からの邦訳『七賢人物語』が存在する⁷⁾。その作品の性行為関連度を調べると、以下の通りである。

序文+15話（短いまとめは皇帝の息子の話の末尾に入る）=全16話

序文*☆，第二の賢人の話*，第三の賢人の話*，第四の賢人の話*◎☆，第五の賢人の話*§，妃の第六話*，第六の賢人の話*☆，妃の第七話*，第七の賢人の話の出来事*，皇帝の息子が語った話（複数組のカップルが関係しその内には*もある）（計10話）

性行為関連度は62.5

どこまで性行為と関連した作品と見なすか、作品数の数え方には異論の余地があることを認めるが、いずれにしてもこのラテン語版の方がさらに性行為関連度が高く、また妃が胸をあらわにして義理の息子を誘惑するなど、先に見たイタリア語版よりも、その表現ははるかにくわしく同時にエロチックである。

イタリアにはもう一つ、1062年にアラゴン王国に生まれたユダヤ人ペトルス・アルフォンシの記したラテン語の説話集『賢者の教え (Disciplina clericalis)』が古くから伝わっていた。この作品は『七賢人の書』のような入れ子式の額縁を持たず、『ウル・ノヴェッリーノ』のモデルと見なしでも全くの見当違いとは言えないような構成と内容とでできている。この作品の場合、その性行為関連度はどうであろうか。この作品は、近年伊藤

額縁に守られて

正義氏⁸⁾ および西村正身氏⁹⁾ によって、それぞれ別個の邦訳がなされている。まず区切りが明確なので計算が容易な西村氏の訳書を調べると以下のような結果が生じた。

序文+本文および(例話を導入するための)地の文28話+例話34+結び=全64話

蟻と雄鶏と犬§, 例話2, 邪まな女☆, 例話9*☆, 例話10*☆, 例話11*☆, 例話13*, 例話14* (計8話)

性行為関連度12.5

他方伊藤氏の訳書では、本文および地の文が例話とあわせて一つにまとめられているために、作品の数がかなり減っている。当然その分性行為関連度は高くなっている。訳文にも多少違いが見られ、たとえば西村氏の訳では、雄鶏は10羽の雌鶏を満足させていると、性行為含みで訳されているのに対し、伊藤氏の訳では雄鶏が雌鶏を支配している、と性行為抜きで訳されている。その結果異なった結果が生じているが、当時のイタリアでどちらの版に近い作品が流布していたのかは不明なので、両方の結果を示しておく。

序文+34話+結語=全36話

第二話, 第八話☆, 第九話*☆, 第十話*☆, 第十一話*☆, 第十三話*, 第十四話* (計7話)

性行為関連度は19.44

この作品のように、各1話が数種のエピソードから成り立っている場合には、作品をどのように分割するかは、研究者の恣意的解釈が入る余地が

大きく、客観的に見て疑問の余地がない正確な数字を出すことは極めて困難になる。そのように作品の総数が増減すると、性行為を含む話の数はほぼ一定であるために、性行為関連度は作品の全体数と反比例して増減し、正確な性行為関連度の計算などはほとんど不可能に近くなる。ただし幸い私たちが今後扱う後代のノヴェッラ集の多くは、各一話が比較的明確に他から独立しているので、性行為関連度の計算は、この場合ほど困難ではないはずである。

いずれにせよ、序文があるだけで額縁が欠けている、『ノヴェッリーノ』と似た枠組でまとめられているこの作品の場合、西村氏の翻訳は言うまでもなく、伊藤氏の翻訳を通して最大限に見積もった性行為関連度ですら、額縁を有する『七賢人の書』や『デカメロン』に比して大幅に性行為関連度が低いことを、まず第一に確認しておきたい。その差は数倍にもおよび、単なる程度の差などという違いではないのである。このような事実は、額縁を用いることによって架空の語り手の口を通して物語を語らせるという形式が、性行為の表現を容易にしているのではないか、という私の推測と合致している。しかしこの場合には、額縁の有無などという問題以前に、両作品の性格や内容の違いが、性行為関連度の差となって現れているのだと主張することは可能だが、たとえそうだとしても少なくとも額縁の存在が『七賢人の書』の高い性行為関連度を妨げていないことは確かである。いずれにせよ『ウル・ノヴェッリーノ』が出現する以前に、すでに外来の額縁のある『七賢人の書』やその類書と、額縁のない『知恵の教え』やその類書とが平行してイタリアに流布しつつあり、前者の方が後者よりも性行為関連度が高かったことを認めねばならない。

ここでもう一つ参考のために、石坂尚武氏が訳されたドミニコ派修士ヤコポ・パッサヴァンティの『真の改悛の鑑』という説教集¹⁰⁾に関してその性行為関連度を調べておく。説教集といっても、1350年以降にフィレン

額縁に守られて

ツェで行われたその説教の内容は、『日本霊異記』などにも似た散文の説話集であり、まとめられたのはボッカッチョの『デカメロン』の完成とほとんど同時代の1354年のことなので、心性史的に『デカメロン』とほぼ同時代の作品であることは確実である。そこには1348年のペストの強い影響が認められ、『デカメロン』とはペストが生んだ双生児のような作品だと言えないこともない。ある意味でペストの記憶が生々しい中、『デカメロン』が創作されていた当時のイタリア人の心性が凝縮されているような作品だと言えそうである。

『真の改悛の鑑』全作品数49篇

10§, 11*, 18 (娼婦), 19 (娼婦), 28*◎, 29◎, 32◎, 33◎ (小計8話) 性行為関連度16.33

なお14と17には結婚して家庭を築く話が出てきて、当然性行為が伴われているはずであるが、直接そのことには触れていないので計算に入れない。ここで得られた数字は、額縁を持たない『ノヴェッリーノ』や『知恵の教え』とほぼ同水準であり、やや時代が下がるとはいえ、額縁を持たないこうした作品の平均値に近い。

以上の調査の結果をまとめると、各作品の性行為関連度は以下のとおりとなる。

『七賢人の書』のオリジナル版『七賢人物語』 62.5 同イタリア語訳のカッペッリ版 46.67 両者の平均 54.59

『知恵の教え』の西村正身訳 12.5 同じ作品で『賢者の教え』というタイトルで刊行された伊藤正義訳 19.44 両者の平均は15.99

『ウル・ノヴェッリーノ』 8.24

『ノヴェッリーノ』 16

『真の改悛の鑑』 16. 33

以上の数字から、16世紀に今日の形に完成したとされるが、14世紀初頭にはほぼ今日の形になっていたと思われる『ノヴェッリーノ』でも、性行為関連度は決して高くはなく、額縁を持たない啓蒙的な説話集として内容的にも多少共通した性格を備えた『知恵の教え』や説教集『真の改悛の鑑』のそれとほぼ同一の水準だが、13世紀後半末に現れたその原型『ウル・ノヴェッリーノ』の性行為関連度は、それらに比して著しく低かったことが分かる。おそらくきめ細かくはりめぐらされたカトリック教会の教化活動とと聖フランチェスコに代表されるイタリア民衆の信仰心の高まりが呼応して、イタリア語圏の住民に対しておそらくほとんど無意識の内に、こうした抑制を課してきたと考えるのが、最も妥当な解釈ではないだろうか。やがて時代が下がるにつれてそうした抑制は弱まり、次第に性行為や性欲はまともに語られるようになる。作品の性行為関連度は時代に沿って高まり、『デカメロン』の同時代になると、説教集ですらほぼ『ノヴェッリーノ』並の性行為関連度を持つに至った、と見なすことができる。

それらに比して、原型は東洋渡来とされている¹¹⁾ 説話集、『七賢人の書』だけは、並外れて性行為関連度が高かった。14世紀前半の他の他の散文作品の平均値の約3倍以上にも及ぶ性行為関連度を有している。西村氏はかつてこの作品の翻訳に伏せ字が付いたという「微笑ましい」事実を記しているが¹²⁾、それにしてもこの数字は高すぎるという印象が否めない。その印象の理由については、次章で『デカメロン』と比較しながら論じることにする。ともかく作者の責任を問う様がない古い外国産の説話集であるという来歴が、このような数値を可能にしたのであろう。『デカメロン』にもその中の作品の類話が見られることから¹³⁾、ボッカッチョがこの作品を読んでいたことはほぼ確実である。すでに以前の論文で論じたとおり、『デカメロン』式額縁そのものはボッカッチョの発明であるが、この作品

額縁に守られて

の存在が『デカメロン』創作に際して、ボッカッチョに示唆を与えていた可能性は大いにあり、額縁がもたらす様々な効果こそ、ボッカッチョがおそらく無意識の内にこの作品から学んだ最も重要な事柄の一つであったものと思われる。

第三章 性行為は『デカメロン』でいかに表現されたか

本章の論議に入る前に、まず『デカメロン』の性行為関連度をできるだけ正確な数字で把握しておかねばならない。すでに見た通り、『デカメロン』に含まれた100篇のノヴェッラの中で、46篇において性行為が関連していたのであるが、『デカメロン』には額縁に関連した部分が結構多数含まれているため、残念ながら『ノヴェッリーノ』の場合のようにノヴェッラの数をそのまま性行為関連度として用いる訳にはいかない。そこで各ノヴェッラ以外に、一まとまりの散文が何個存在しているかを、V. ブランカ博士監修の全集本¹⁾の構成に従って、以下で計算してみよう。ただし毎日の始めに付けられたタイトルに当たる一文は、当然その日の序文の一部と見なすことにする。まず一日目の場合、作品全体のプロエミオ（緒言）の後、第一日目の序文が記され、ノヴェッラに付随する前後の文章は当然各ノヴェッラに属するものと見なすことにして、それらをも含めた10個のノヴェッラが語られた後に、第一日目のカンツォーネを含む結びが記される。第二日目以後は、全体へのプロエミオを除いて、第一日目とほぼ同じことが繰り返されて、第十日目の結びに至るので、毎日10篇のノヴェッラの前後に各2篇の短文が置かれていることになる。さらに全体の最後に「作者の結論」と題した一文が置かれている。したがってノヴェッラ以外の文章は、 $2 \times 10 + 2$ （プロエミオと結論）=22となる。

その内の第四日目の序文は特に長文で、男性の女性を求める気持は人間の本性であることが記されてはいるが、性行為は描かれていない。それ以

外の毎日の序文は、特に後半では、極めて短い形式的なものとなっている。それらの日々の日常を描く毎日の序文と結びの部分では、ペスト大流行という未曾有の危機に直面してフィレンツェを再建するために設けられた、若い男女の一種の修行の場だと見なす筆者さえ存在しているほど²⁾、語られている多くの内容とは対照的な、清潔で真面目な生活が営まれているので、性行為などが入り込む余地はなかった。そのためすでに前論文で記した46という分子の数字はそのまま、分母は全体のノヴェッラ100に、まとまった散文の数が22加わり122となり、性行為関連度は37.70となる。作品と共に表にまとめると以下の通りである。

『デカメロン』の散文の総数、ノヴェッラ100+プロエミオ+作者の結論
+ (毎日の序文と結論) × 10日分 = 全122篇

I - 4◎, I - 5*☆, I - 9 (凌辱) §, II - 2, II - 3, II - 7, II - 8 (女性からの誘惑)*☆, II - 10*, III - 1◎, III - 2 (女性は自覚せず)*, III - 3, III - 4◎*, III - 5*, III - 6*, III - 7*§, III - 8◎*, III - 9, III - 10◎, IV - 1, IV - 2◎*, IV - 3*, IV - 9*§, IV - 10§, V - 4, V - 6, V - 7, V - 10*, VI - 7*, VII - 1*, VII - 2*, VII - 3◎*, VII - 5*, VII - 6*☆, VII - 7*, VII - 8*☆, VII - 9*, VIII - 1*, VIII - 2◎*, VIII - 4◎, VIII - 8*, VIII - 10, IX - 2◎, IX - 6*, IX - 10◎*☆, X - 5*☆, X - 8* (小計 46篇)

性行為関連度 37.70

まず前章で調べたそれ以前の作品の数字と比較すると、『ウル・ノヴェッリーノ』が8.24、『ノヴェッリーノ』が16であるのに対し、『デカメロン』の性行為関連度は前者の4.58倍、後者の2.36倍となり、何よりもまず大幅な伸びを示していることを確認しておきたい。特に14世紀前半にはほぼ完

額縁に守られて

成されていたが、16世紀に手直しを加えられて今日の形になったとされている『ノヴェッリーノ』および説教集も含めて、それ以前と同時代の額縁なしの説話集に対しても、約2倍またはそれ以上の伸びを示しているという事実は重要であり、かつて『ウル・ノヴェッリーノ』で認められた抑制から解放され、この時点でイタリアの散文にエロスが開花している、と言っても決して過言ではない。

もちろんこうした変化をもたらした最大の原因は作者の資質によるものと思われるが、そうした資質を現実には発揮させ得たものはボッカッチョ自身の創意工夫であり、具体的には前章で見た額縁の発明であった。私はすでに前の二つの論文において、ボッカッチョが三度にわたる試行錯誤の後に、ベストを逃れた10人の若い男女が郊外の別荘で物語を語り合うという『デカメロン』の額縁を完成し、登場人物という他人の口を通して語らせるといふ擬制(他人性)によって、当時厳しい監視の目を光らせていたカトリック教会の抑圧をかわそうと試み、その結果聖職者の墮落を嘲笑すると同時に、かつてなく自由に性行為を表現したことを指摘した³⁾。たしかに聖職者風刺に関しては、その指摘は当たっていたかも知れないが、性行為の表現に関しては、前論文における私の力点の置き方が、全く誤っていたわけではないけれども、多少偏っていたことを認めなければならない。

私は前論文で「溺れるものは藁をもつかむ」という諺を援用しておいた⁴⁾ように、正直のところ、検閲に対する他人性の効果をそれほど強く想定していたわけではない。いかに作者が他人の口を通して語らせるといふ擬制を用いようとも、もしも検閲者に敵視されていれば、そんな擬制など大してあてにならないことは明らかだからである。だが当時のヨーロッパではまだ印刷術が発明されておらず、もっぱら手稿が交換されていた時代なので、異端者として危険視されている特定の人間以外は、仲間同士で何を書こうとそれほど教会の検閲を気にする必要はなかったはずであり、こ

の面での他人性の効果は、私が前論文で強調しておいたほど大きくはなかったかも知れない。しかし発言の責任を他人に転嫁する他人性という特性から、それよりもはるかに大きな別の効果が期待できたのである。すなわちたとえば性行為のように、それを記す際にも、あるいはそれを讀んだり聞いたりする際にも、羞恥心を伴う題材を記す場合、自分が書いたのではなく、他人が話したことを記録しているのだと装うことによって、それを書いている本人の羞恥心を和らげるという効果である。またあわせてその読者たち（と言ってもこの時代には恐らく大半は朗読の聞き手だったはずだが）の羞恥心をも和らげることができたはずである。今日のように性行為の表現など珍しくもない時代とは異なり、すでに『ウル・ノヴェッリーノ』に関して見たとおり、カトリック教会の禁欲の教えが日常的に説かれていて、性行為に関する表現がきわめて乏しかった当時のイタリアでは、そうした記述を行う行為だけではなく、ただそれらを読むというだけの行為にも、厳しい抑圧が働いたことは容易に想像し得るからである。他人が語ったことを伝えているという擬制によって、作者も読み手も聞き手もそうした抑圧が緩和され、時にはそうした情報を発信している人々を批判的に見ている振りをするにすら可能になる⁵⁾。もちろんそれはあくまで一種の欺瞞だが、他人に対してではなく自分（と自分の仲間たち）に対して行う欺瞞なので、確実な効果が期待できる。とりわけ印刷による出版が行われている今日とは異なり、書物はもっぱら筆写によって作られたこの時代には、テキストの入手が困難なため朗読による集団的な文学の享受の仕方が優勢だったので、一種の集団心理に基づいて、他人が語った言葉を聞いているという擬制には、今日の私たちが想像する以上に羞恥心を克服するための効果があったはずである。『デカメロン』の額縁の中で見られる聞き手の反応には、そうした効果を強化するための仕掛けが巧妙に施されている⁶⁾。このように、従来イタリア人を縛ってきた羞恥心の抑圧から逃れた

額縁に守られて

ことが、『デカメロン』でエロスが開花した最も重要な原因の一つであった。

以上の記述を読んできた人々の中には、前章で示された数字に基づいて以下のような疑問を呈する方がいるかも知れない。それは、『デカメロン』の性行為関連度の34.85という数字は、それ以前のイタリア・ノヴェッラよりはずっと高いが、『七賢人の書』に比較するとはるかに低く、比較的性行為関連度が低いカッペッリ版でさえも、46.67という、『デカメロン』よりも10以上高い数値を出している。だから当時イタリアに紹介されていた外来のノヴェッラ集ではとっくにエロスが開花していて、『デカメロン』は単にそれに追随しただけなのではないか、という疑問である。もしもそうだとすると、イタリア・ノヴェッラにおけるエロスの開花には、外来のノヴェッラ集が大きな影響を与えていたということになる。その場合作品の性質は異なっている、額縁を備えているのでやはり他人性の効果が大いに期待し得る『七賢人の書』がすでにとっくに実現していた事柄を、ボッカッチョが『デカメロン』において控え目な仕方でもぞっただけだったということになり、たしかにイタリア・ノヴェッラの流れではエロスの開花が認められるとしても、ボッカッチョが果たした役割は、それほど大きいとは言えないだろう。

しかし素直に『デカメロン』と『七賢人の書』とを読み較べる時、後者の性行為関連度の高さに意外感を抱く人は少なくないはずである。特に鳥居氏訳のカッペッリ版は、読んでいて特にエロティックな作品だという印象を与えない。すでに私は、性行為関連度はエロティシズムの濃度をそのまま反映しているものではないとことを指摘したが、まさにこの場合に、その端的な実例が認められる。カッペッリ版の性行為関連度を高めている最大の理由は、全作品数の少なさで、わずか15という分母の小ささが、数字を一挙にはね上がらせているのである。さらに性行為の表現自体を検討

すると、性行為に関連しているとして計上されている7篇の内、作品3は遠い過去の不倫がばれた話、13の不倫は井戸をめぐる笑い話に入る前の前提に過ぎず、14は烏同士の雌の奪い合いなどという、全然エロティックでない事柄を扱っている。7では一応不倫が行われているようであるが、主題はあくまでいかに狡猾な妻が夫に忠実なカササギを騙したか、というペテン話の前提に過ぎない。残る3篇の中で、序文と5は女性の側が性行為に至る以前に一方的に熱を上げる話で、未遂で終わっているとは言えその部分全体に関っていると見なし得る。そして嫉妬深い裁判官の夫から金持ちの若者がその妻を奪い去る9のみにおいて、まともに性行為が実行され、その行為がその部分全体と対応しているのである。そこで先に見た性行為関連度の不備を補うために、性行為が作品の中で主要な役割を果たしている作品だけを算出する性行為主要関連度という数値を加えるならば、15篇中たった3篇で、20という数値が得られる。この数字はかなり私たちの印象に近いものである。これではいくら性行為関連度が高いとはいえ、この作品でエロスが開花しているとは言えない。なお性行為主要関連度は性行為関連度に比較すると、私たちが感じるエロスの濃度により近い数字ではあるが、作品の解釈に大きく依存しているために、客観性が乏しい、恣意的な数字であることは否定し難いだろう。しかしこれも一つの指標としては有効であると思われる。

西村氏訳の『七賢人物語』の場合、性行為関連度が62.5とさらに高い。構成もカッペリ版とはかなり異なり、たとえばこの版の第七の賢人の話の後で記された、皇帝の息子が妃の侍女の中に男が交じっていることを暴露し、その結果妃の処刑が決定されるという極めて重要な場面は、なぜかカッペリ版には認められない。西村氏訳の版自体、1342年の最古のインスブルック写本に基づくとされている⁷⁾ので、この作品の様々な版の内かなり後期にできた完成版の一つと見なされるべきもののようであり、こ

額縁に守られて

の版自体がイタリアで知られていたかどうかは不明である。だがそこに描かれた性行為を吟味すると、カップベリ版に関して記した事柄が、かなりこの作品の性行為に関してもあてはまる。第二の賢人の話は井戸の話の前提、第三の賢人の話はカササギを騙す話、第五の賢人の話は古い不倫がばれる話、第六の賢人の話は性行為の実行には至らぬ美人局のペテンの繰り返し、また第七の賢人の話の後で前記の通り妃の愛人の暴露が行われているが、性行為がその部分の主要な要素ではない。それに対して性行為が物語の主要な要素となっているのは、未遂に終わっているとは言え、女性からの一方的な性行為への欲望を描いた序文と第四の賢人の話、妃が語る第六話の金目当てで王様に妻を差し出した執事の話、同じく妃が語る第七話の監禁された王妃を王様から奪う騎士の話、また記述は簡単だが、皇帝の息子が語ったロドウィークスが王女の寝室に忍びこむ話あたりで5篇となり、性行為主要関連度は31.25となる。この版は妃が義理の息子を誘惑する序文の場面一つ取ってみても、胸をあらわにして義理の息子に迫るなどといった、カップベリ版よりもはるかにエロティックで詳細な描写が見られ、全体的にエロスの濃度が濃くなっていることは確実である。しかしすでに記したとおり、やはり分母の数字、つまり作品の絶対値が16と小さすぎる上に、先に見た通りこの版は『デカメロン』よりもわずかに早くインスブルックで完成したものなので、『デカメロン』の先駆けと見なすには、完成時期が遅すぎるであろう。

こうして『デカメロン』以前の作品の作品としては異例に性行為関連度が高かった『七賢人の書』においてすら、たとえ性行為が言及されている場合でも、巧みな欺瞞や珍事などの前提であったり、過去の不倫の露見であったりなどと、物語の進行に不可能な要素としてやむを得ず取り込まれている場合が大半なので、性行為関連度がそのままエロスの濃度を反映していたわけではなかった。しかしその他の性行為関連度が低い作品の場合

には、ほぼ確実にエロスの濃度が低いことが予想し得る。たとえば『ノヴェッリーノ』では5⁸⁾、『ウル・ノヴェッリーノ』では3.53⁹⁾という小さな数字になっている。これらの数字も両作品についての私たちの印象に近いと言えるだろう。以上の結果から、性行為関連度の高さは作品のエロスの濃度の高さの必要条件ではあっても、十分条件ではないことと、主観的解釈に左右されるきらいはあるが、性行為主要関連度はある程度エロティシズムの濃度を反映する尺度となり得ることが分かる。

すでに見たとおり、『デカメロン』の性行為関連度は『ウル・ノヴェッリーノ』や『ノヴェッリーノ』、あるいはその他の説話集よりも高かったが、『七賢人の書』にはかなり劣っていた。しかし作品中のエロスの濃度に関しては、決してそうは言えない。なぜなら『デカメロン』において性行為が言及されている作品では、すでに見た『七賢人の書』あるいはそれ以外の作品とは異なり、すでに見たそれらの作品のように物語の進行上やむを得ないから性行為に触れるというのではなく、まさに性行為そのもの、あるいはそれに関わる事柄を語るためにそのノヴェッラを語っている、という印象を受ける場合が圧倒的に多いからである。たとえば一日目にディオネオオが語った修道院内部の出来事は、ある修道士が性行為を行う権利を院長に認めさせた経緯を描いたもの（I-4）であり、それに触発されてフィアンメッタが語ったのは、夫が十字軍に従軍している留守に、不倫したさに訪問したフランス王の欲望を、モンフェルラート侯爵夫人がいかにか巧みにかわしたか（I-5）という物語であった。方向こそ正反対で後者は未遂に終わっているが、性行為こそが主要な登場人物の行動の動機なのである。このようにボッカッチョのノヴェッラの多くは、性行為そのものを作品の中で真正面から、いわば現在進行形で扱っているために、この作品はその性行為関連度の数字以上にエロスの濃度が高いのである。ちなみに未遂に終わったものをも含め、性行為を作品の主要な要素として扱って

額縁に守られて

いる作品は以下の通りである。

I-4◎, I-5*☆, II-2, II-3, II-7, II-10, III-1◎, III-2*, III-3*, III-4◎*, III-5*, III-6*, III-8◎*, III-9, III-10, IV-1, IV-2◎*, IV-3*, V-4, V-6, V-7, V-10*, VI-7*, VII-1*, VII-2*, VII-3◎*, VII-5*, VII-7*, VII-9*, VIII-1*, VIII-2◎*, VIII-4◎, VIII-8*, IX-2◎, IX-6*, X6*, X-8* (小計 37篇) 全122篇。性行為主要関連度は30.33。

『デカメロン』と『七賢人の書』のインスブルック版とを比較する時、性行為主要関連度の数値そのものは、たしかに前者は後者にはまだわずかに及ばないが、ノヴェッラとその他の散文（その一部にはカンツォーネが含まれる）の数が、16から122へと7.63倍も増大していて、その内のほとんど同じ比率の作品で性行為が主要な役割を演じているという事実が、読者に対して全く異なった効果を与えていることが分かる。たとえ比率においてはわずかに劣っていても、37篇という絶対値の大きさが、たった5篇の場合には予想できない圧倒的な効果を読者に対して発揮しているのである。おそらく性行為主要関連度という数値は、全体数が増大すればするほど、それがもたらす効果が累積して増大していくという性質を備えているものと思われる。

さらに注目すべき事柄は、ポッカッチョが性行為そのもの（もちろん例外的な場合を除いてだが）を肯定的に扱えているということと、それどころか『デカメロン』のいくつかの作品において、性行為に至上の価値を与え、性愛至上主義とも呼び得る立場に立っていることである。そうした立場が端的に表現しているのは、ディオネーオの口から語られたI-10で、

そこでは知力は優れているが体力がひ弱い裁判官の夫から、無数の祭日を口実にして性行為を拒否されていた妻が、舟遊びに出て誘拐された海賊を相手にして性愛に目覚めた結果、連れ戻しにやって来た夫の許に戻ることを拒否し、夫が死んだ後は海賊の正式の妻となるという話が語られている。さらにそうした性愛至上主義を駄目押ししている作品が、フィアンメッタによって語られたⅢ－6である。そこでは夫を深く愛している夫人を恋したりッチャルドが、夫人の嫉妬心を利用して、彼女の夫が浮気している現場に案内すると偽って温泉宿に誘い出し、夫の振りをして夫人と交わり、真相を知って悲しむ相手をうまく宥めたあげく、「夫のキスよりも恋人のキスの方がどんなに甘いかを悟って、その頑なさをリッチャルド（恋人）へのやさしい愛に一変させ」¹⁰⁾るまでの経緯が語られている。夫を熱烈に愛していたはずの妻が、一回の性行為によって生まれ変わる有り様は憐れを催すが、まさしく性愛の力を見せ付けている作品だと見なし得る。こうしたテーマを扱う際、ボッカッチョはディオネーオとフィアンメッタという二人の語り手に特別な役割を与えているようである。『デカメロン』全体でバンピーネアとパンフィロが担っていた指導的役割を、エロスの表現に関してはこの二人に担わせているのである。

おそらく現代人にとって、『デカメロン』執筆当時のボッカッチョの女性観は、問題を含んでいるものだろう。それは特別嫌いな相手でない限り、本来女性は性行為を求めているものだときめ付けているような箇所が、時折見られるからである。たとえば外国の王子の許に嫁ぐため地中海を航行する途中で船が難破したため、再び嫁ぐ前に8人の男と一万回（原文のまま）は寝た女王アラティエルの話（Ⅱ－7）の途中で、淑女たちがしきりに羨ましがって溜息をついていたと記したり¹¹⁾、唾をよそおって女子修道院に雇われた男が修道女たち全員に迫られて身体が持たなくなり、ついに修道院長相手に口を利いてしまう話（Ⅲ－1）の類いを他にも¹²⁾を書いて

額縁に守られて

いるからである。こうしたきめ付けは、現代ではセクハラそのものだと受け取られるかも知れない。そして後年ポッカッチョは、女性たちのために『デカメロン』を書いたのとは打って変わって、女性を非難し呪詛した作品『コルバッチョ』¹³⁾を執筆することになる。

ともかく以上の調査の結果として、『デカメロン』という作品は、『七賢人の書』のような外来の作品を除くと、それ以前と同時代の中世イタリアの文学作品の中では、性行為関連度に関しても、性行為主要関連度に関しても、抜群に高い数値を示していることは明らかである。またそれらの数値の点ではやや劣る『七賢人の書』のインスブルック版と比較した場合でも、全体数の大きさと性行為に焦点をあてている作品が多いこととで、読者に与えるエロスの効果は『デカメロン』の方が圧倒的に強烈であった。だから『デカメロン』において中世イタリア文学のエロスが開花したという表現は、誇張ではなく事実である。その際における額縁の存在は、教会に配慮しているというアリバイを提供するとともに、執筆者、朗読者、聞き手または読者の羞恥心を緩和することによって、このエロスの開花のために大いに寄与したのである。

第四章 『デカメロン』におけるエロスの開花はいかに準備されたか

それでは前章で見たようなエロスの開花はどのようにして実現したのであろうか。もちろんこうした疑問に正確な解答を与えることは不可能である。極端な話、ポッカッチョが突然エロスの魅力に目覚めて、奇跡のような成長を遂げたという主張さえも可能だが、やはりそれ以前に何らかの準備段階があったと考える方が妥当だろう。そこで本章では、あくまで厳密に証明することが不可能な一つの仮説として、『デカメロン』においてエロスが開花するまでの過程をたどってみることにしたい。その場合に私たちにヒントを与えてくれるのは、前論文で見た額縁の形成過程である。す

でに何度も記した通り、『デカメロン』の額縁が完成する以前、少なくとも三度はそれと似て複数のメンバーが交互に発言するという設定が利用されていた。それらの設定の中で、どの程度性行為が関連しているか、またどの程度性行為が主要な役割を演じているかを調べれば、『デカメロン』におけるエロスの開花に至る過程がたどれるのではないだろうか。少なくとも何らかのヒントは期待できるはずである。こうした予測に基づいて調査した結果を以下に記す。

まず以前の論文で私が設定Aとした、『フィローコロ』に現れた恋愛評定¹⁾の場合、そこにはその場の女王役のフィアンメッタに対し以下の13の設問が提出されている。

設問1：娘は帽子を奪った相手と与えた相手のいずれをより愛しているか。

(フィアンメッタの) 判定：与えた相手。

設問2：相思相愛の関係で結ばれた後に男が追放されたカップルと、相思相愛だが邪魔が入って結ばれていないカップルのどちらがより不幸か。

判定：結ばれた後に男が追放されたカップル。

設問3：武勇に優れた人と気前の良い上品な人と賢い人のいずれを恋人に選ぶべきか。

判定：賢い人。

設問4：しつこい求愛者を断るために、人妻が難題を出すか、求愛者は魔術師の助けを借りてその難題を解決した。夫は妻に約束を守れることを許し、寛大さに感激した求愛者は約束の履行を求めず、魔術師は報酬を求めなかった。三人の内だれが最も寛大だったか。

判定：夫。

設問5：愛する女に愛されないことと、自分の愛人がひそかに別の人を愛

額縁に守られて

しているのではないかと疑い、嫉妬していることとでは、どちらが苦しいか。

判定：愛人を疑い嫉妬していること。

設問6：駆け寄ってキスした少女と立ち止まった少女のどちらが強く愛しているか。

判定：立ち止まった少女。

設問7：幸福になるためには、人は恋すべきか否か。

判定：恋すべきではない。

設問8：若者が恋する相手として自分より高貴で富裕な女を選ぶべきか、そうでない女を選ぶべきか。

判定：自分よりも高貴で富裕な女を選ぶべきである。

設問9：未婚の娘と人妻と未亡人の内、いずれを恋人に選ぶべきか。

判定：未亡人。

設問10：火刑を宣告された未亡人のために二人の騎士が決闘し、一人は勝ったことで、もう一人は負けたことで未亡人を救ったが、未亡人はいずれと結婚すべきか。

判定：勝った方の騎士。

設問11：恋人を見ることと、思うこととでは、どちらの喜びが大きいか。

判定：思うこと。

設問12：醜い老女と若くて美しい恋人と、それぞれ一年ずつ同棲せねばならない時、どちらと先に同棲すべきか。

判定：若くて美しい恋人。

設問13：かつて冷たかった恋人が出産のために死んだと聞いた騎士が、恋人の墓に入ってその棺を開き、その身体に触れると相手が蘇ったので、家に連れて帰り無事に出産させた後、健康になった母子を夫に返す。騎士の忠実さと夫の喜びのいずれが大きいか。

判定：騎士の忠実さ。

『デカメロン』の読者なら、設問4と設問13が『デカメロン』の第10日目のノヴェッラ（X-5, X-4）の素材であることに気付くはずで、これらの問答はそれほど緊密に『デカメロン』と結びついているのである²⁾。以上の問答の中で、未遂をも含めて明らかに性行為が関連しているのは、設問2, 設問4, 設問9, 設問12である。もちろんこの部分だけをノヴェッラ集と単純に比較するわけにはいかないが、その性行為関連度は全13問中4問なので、30.77となり、決して小さい数字ではない。しかもその4問のいずれにおいても、性行為が主要な要素を占めている。すなわち設問2では性的関係の有無が二つの恋の決定的な違いであり、設問4では恋する夫人相手に性行為を行うことが、高額報酬で魔術師を雇った求愛者の目的である。設問9の恋人には未亡人が最適だとする判定の場合、未亡人には性行為の経験があることが決め手となっている。そして設問12は、同棲する相手との性行為が義務付けられていたから、選択問題として成り立ったのである。また性行為には直接関連していないが、設問13においては、難産で死んだために埋葬された、かつてつれなかつた片思いの相手を掘り起こした騎士が、「必要以上に大胆になって、遺体にキスするだけでは満足できず、両手で冷たい胸の乳房の間やさらには肉体の秘められた部分まで、豪華な衣装の下をまさぐり始めました」³⁾とあり、その刺激で仮死状態にあった妊婦が蘇ってしまうのである。これらの記述から、ボッカッチョがごく初期の作品『フィローコロ』執筆当時から、恋愛と性行為とを結び付けて考えていたことは明白である。

ここでまず確認しておくべき事柄は、今日の文学史的知識によると、ダンテやペトルルカのような性愛抜きの恋愛がイタリアにおいて支配的であった時代にこの作品が書かれた、という事実である⁴⁾。少なくとも私たち

額縁に守られて

が残された作品を読む限り、ダンテはベアトリーチェと、またペトラルカはラウラとの性行為を夢想だにしなかったという印象を受ける。もちろん現実のダンテやペトラルカには子供がいたから⁵⁾、彼らが性行為を行わなかったという意味ではなく、彼らは恋愛と性行為とを結び付けようとしなかったことを意味している。ダンテの同郷人で崇拝者であり、同時にペトラルカの熱烈な崇拝者であったボッカッチョは、当然そのような恋愛観を受け入れていても不思議はなかったはずだが、実はその初期のころからそうしていなかったことが、以上の恋愛評定によって分かる。私たちはダンテやペトラルカなどという偉大な天才の名前に幻惑されて、彼らの恋愛観を中世ヨーロッパにおける普遍的で伝統的なものと錯覚し勝ちだが、恋愛と性愛とを完全に断絶させる彼らの恋愛観は、『トリスタン・イゾー伝説』などに代表される中世の恋愛文学の流れの中で、主流を占めるものではない⁶⁾。トゥルヴァドゥールの作品でも、暁に一夜を共にした恋人との別れを悲しむ「アルバ」⁷⁾などの主題は、性愛を抜きにしては考えられない。ダンテやペトラルカの恋愛観は、おそらく聖フランチェスコに代表される熱烈なカトリック信仰熱の影響の下で生じた、清新体派的とも呼ぶべきイタリア的偏向の現れだと見なすべきであろう⁸⁾。若くしてフランス王国の出店のようなナポリのアンジュー王朝に出入りしたボッカッチョは、『フロワールとブランシュフロール』という作品を下敷にして長編の散文『フィローコロ』を書いたという事実⁹⁾からも明らかな通り、フランス文学の影響をまともに受けていて、フィレンツェ人であるにもかかわらず、イタリア的、清新体派的偏向から完全に解放されていたと言えるだろう。

たとえば周知の通り、ダンテやペトラルカは恋人の死後その死を悼んで『新生』や『カンツォニエーレ』を完成させた¹⁰⁾が、それらの作品から判断する限り、同じ立場におかれた設問13の騎士のような行動は夢にも考えなかったと見なしても差し支えあるまい。ダンテがベアトリーチェの墓に、

あるいはペトラルカがラウラの墓に侵入して、その遺体と対面するなどといった行動は、彼らの作品からは夢にも考えられず、もしもダンテがそんなことをしていれば、『新生』は全く別の物語になってしまっていただろう。したがってボッカッチョは、早くもナポリ宮廷に出入りしていたころから、すでに二人の先輩とは異質な恋愛観を持っていた、と推測できる。そういえば、同じ『フィローコロ』の第4巻の118章以下¹¹⁾では、ビアンチフィオーレが捕われている塔に忍び込んだフィローコロが、彼女の寝室の花束の下に潜んでいて、眠ってしまった彼女を起こして愛し合い、二人が愛に熱中し過ぎて裸で眠っているところを捕えられてしまう。二人が網に包まれたままさらしものにされ、火刑に処せられるところを寸前に仲間助けられるというのがこの作品のクライマックスである。ここでも性愛は重要な役割を果たしており、この作品が先に記したような、イタリア的、清新体派的偏向とは無関係なことは明らかである。

もっとも今日の文学史的知識から、ダンテやペトラルカのような恋愛観が、当時のイタリアにおいて支配的だったと即断することはできない。ダンテの『新生』の「新」と訳されている「ヌオーヴァ」には、「新しい」の他に「珍しい」という意味があり、ダンテの恋愛がフィレンツェの婦人たちにとって珍しいものであったことをダンテ自身が記しているからである¹²⁾。ペトラルカの場合でもその恋の純粋さが世にも稀なものだったから愛誦されたのであろう。だからボッカッチョがこれら二人の「まれびと」を模倣しなかったとしても、決して特異なことではあるまい。むしろそれ以上に重要なことは、すでに性行為関連度を通して確認した、イタリア語の散文、とりわけそのノヴェッラにおけるエロスの濃度の低さである。少なくともこれまでの調査によって、今日残されている外来の作品を除いたイタリア語の散文には、性行為は後世に比べて稀にしか語られてこなかったことが推定され、ダンテやペトラルカの恋愛観も、そうした現象をもた

額縁に守られて

らしたのと同じ心性に起因するものだと推測し得るのである。恐らくボッカッチョは、そうした心性に支配されていなかったのであろう。

続いて、やはり『フィローコロ』の中に見られた設定Bを取り上げるが、これはフィローコロの一行がナポリの周辺を旅行中に旅先で聞いた、その土地にまつわるエピソードで、4人の美しい悪女が、異性をいかに苦しめたかを自慢しあい、異教の神々を侮辱したため、罰として物体に変えられた話で、具体的には以下の通りである。

1. アレイラムは誰をも愛さず、彼女に恋する余り松の木に変身した男を斧で切ったと自慢したために、ヴィーナスとキューピッドによって白大理石に変えられる。
2. アセンガは自分が神々よりも美しく愛されており、女神と呼ばれるべきだと自慢したために、彼女に侮辱された月の女神ダイアナによってイバラの木に変えられる。
3. アイラムは、太陽神が馬車の進路を誤るほど彼に愛されたが、贈り物を騙し取った後に振ってやったことを自慢したため、太陽神によってザクロの木に変えられる。
4. アンナヴォーイは、男たちに愛され5人の崇拜者とダイアナの森を荒らしたことを自慢したため、ダイアナによってアセンガとは花の色が違うイバラの木に変えられる。

これはオウイディウス¹³⁾の影響が著しい変身譚で、強いて言えば1.に男から「恩恵」を求められるという箇所があるものの、ここには直接性行為に関連する記述はほとんど認められず、性行為関連度は0である。モンドドーリの全集版で13ページ¹⁴⁾という短さで、一見取るに足らぬように見える記述であるが、設定Cのリハーサルのような意味を持っている点で、

決して無視し得ない箇所であると私は考える。すでに見た設定Aは、あくまで中世の恋愛評定をなぞった形式を取っていて、各自が自分の語りたい事柄を語る額縁からはまだ程遠い設定であった。ところが集まったメンバーが交互に語り合うという一見類似した形式を取りながら、内容を恋愛に関する画一的な質問から、意地悪な美女たちの勝手な自慢話へと転換することによって、一挙に新しい世界が開かれたのである。ボッカッチョがこの部分を早々に切り上げているのは、書くべき事柄が尽きたわけではなく、すでに山場を越えた『フィローコロ』の中で、中途半端にこの設定の可能性を追及することは得策ではないと判断したからに違いない。先に見たように、設定Bには性行為は全く関連していないが、そこで女たちを追い回している人間や神々は、ダンテやペトルルカのように性行為とは無関係な恋愛をしているのではなく、ひたすら性行為を求める雄たちであることは明らかである。だからこの設定を用いれば、いくらでも性行為主要関連度の高い作品を創作することが可能になるはずである。ボッカッチョがこの設定を4話に止めたのは、書くべき素材が尽きたためではなく、豊富過ぎたために違いない。

そのことを裏付けているのは設定Cで、ボッカッチョは、フィレンツェ帰国後に発表した第一作『アメート』、別名『フィレンツェのニンフのコンメーディア』¹⁵⁾において、この形式から期待し得る可能性を追及している。『アメート』は、散文とかなり長い韻文が交錯したいわゆる混交体の作品で、アメートという粗野な若者が、リーアというニンフとめぐり会い、彼女の仲間たち7人のニンフの告白を聞いて成長し、洗練された優雅な恋人に生まれ変わる、という粗筋でできている。この7人の女性が交互に告白を行うという設定こそ、『デカメロン』の額縁の先駆的な形態としてほぼ公式に認められている。7つの告白を簡単にまとめると、以下の通りである¹⁶⁾。

額縁に守られて

1. モプサの告白。パラスの神につかえたモプサはヴェルトウンノという農業の神と結婚したが満足できないでいると、小舟に乗った青年アフロンにあって、初めは冷たかった相手に、上着を上げて胸を見せることで誘惑に成功し、相手は誘いに応じる。
2. エミリアの告白。母に命じられて結婚し一児を生んだ後、草原でヴィーナスに会い、死んだように倒れている若者をあずけられ、彼の身の上を聞いてその恋人となる。
3. ディアノーラの告白。ペルッツィ家に嫁いでいるが、ポモーナの案内で美しい庭園を巡り、美しい若者ディオネオに会い、生い立ちを聞いて彼の愛の誓いを受け入れる。
4. アクロモニアの告白。16歳でシチリア人に嫁ぎ愛には冷淡だったが、ヴィーナスの火に焼かれて嫌っていた若者アパテンが好きになり、彼も洗練されて互いに愛し合う。
5. アガベスの告白。醜い老人と結婚させられてヴィーナスに祈ると、美しい若者アピロスが紹介され、二人はすぐお互いに好きになり、老人の夫を拒否して若者に抱かれる。
6. フィアンメッタの告白。母はロベルト王の愛人で最初ヴェスタの巫女にあこがれたが、富裕な貴族と結婚。夫の留守に一人で眠っているとナイフを持った若者が侵入。思いが果せないと死ぬという。自分を恋した経緯を聞く内に好意を抱き、彼の愛を受け入れる。
7. リーアの告白。アメートとの恋は本人が知っているので省略して、フィレンツェが第二のテーベとして建設され、何度も破壊されながら発展した様子と自分の身の上を語る。

以上7つの告白の内、実際に性行為そのものに関連しているのは、1., 5., 6. の3つであり、性行為関連度は42.86である。もっとも5. では少し触れているだけであり、1. も部分的にはかなり露骨な表現が用いら

れているものの、全体的には簡単な記述である。6. だけは男女のやり取りが比較的くわしく語られていて、ロベルト王の庶子のフィアンメッタが一人で眠っている寝室に、裸の若者がナイフを持って侵入する。王女は彼の言葉を聞いて同情し、その願いをかなえてやるという内容で、その若者は他ならぬボッカッチョ自身だと見なせるように描かれている¹⁷⁾。

先に見たこの設定の性行為関連度の42.86という数値は決して低くはないが、すでに見た通り性行為は実際にはあまり大きな比重を占めていない。またこの告白の部分は作品中の散文の半ば以上を占める重要な部分ではあるが、その前後の散文や長短あわせて約20篇に及ぶ韻文の部分は、性行為とは無関係である。だから『アメート』全体においては性行為関連度は低く、まだエロスが開花しているとはとても認められない。

しかし実は7つの告白の内、ほとんどフィレンツェ建国伝説に終始しているリーアの告白を除く6つの告白は、結婚生活に満足できない上流夫人たちがいかにして若い愛人を得たかを告白するという類似した内容と構造を有していて、たとえその中では語られていなくとも、その恋愛とはまさに性行為そのものだと見なしても差し支えないものである。また7. のリーアとアメートとの関係も、その例外ではない。したがってこの設定に関してのみ言えば、潜在的には性行為関連度が100となることも十分あり得たのである。それがこの程度の数字に抑えられた最大の理由は、おそらくこの告白のかなりの部分が、実在のモデルを有していたためだと考えられる。たとえばすでに見た通り、6. のフィアンメッタの告白には、ボッカッチョの自伝的要素が含まれているし、2. のエミリアの告白の中でも、私生児であるボッカッチョの出生の事情らしいものが語られていて、瀕死の状態で倒れていてエミリアに介抱され、不幸な身の上を語る若者こそ、ナポリから帰国したばかりの私生児ボッカッチョ本人だと見なすことができる¹⁸⁾。同様に主人公のアメートを始め、7人のニンフおよびその夫たち

額縁に守られて

等、作品中の登場人物たち全員に関しても、フィレンツェ市民や上流夫人のモデルが推定されている¹⁹⁾。作品そのものが優雅な田園を舞台とし、肝腎の告白そのものも、ごく一部を除いては曖昧模糊としていて、性行為にもあまり触れられていない最大の理由は、モデルと見なされた人々やその関係者に配慮した結果だと推測し得る。それどころかこれだけの記述でさえも、モデルとされた上流夫人とその夫たちにとって、十分スキャンダルであり得たのではないかと想像され、逆にその話題性がある種の宣伝効果をもたらしたことも推測し得るのだが、今日のように文学作品が印刷されているわけではなく、愛好者の間でひそかに読まれかつ朗読されるだけの時代であり、また記録されることに特別な希少価値が認められていた時代のことなので、少なくともニンフとして描かれた本人たちには、モデルに選ばれて作品に記録されることが厭わしくはなかったのだろう。ともかくモデルの存在が表現を規制したことは十分考えられる。

以上三つの設定を通して、『デカメロン』に至った過程を検討した結果をまとめると、以下の結果が得られる。

1. ボッカッチョは、当時イタリアにおいて支配的であった、恋愛と性行為を無関係なものと見なす恋愛観とは無縁であった。その端的な例が6. のフィアンメッタの告白で、そこではボッカッチョ自身と思しき人物が、裸で自殺用のナイフを持ち、夫の留守に一人で眠っている彼女の寝室に忍び込み、長年にわたる自分の恋心を訴えているのである。すると彼女は、「あらゆるいい加減さをすてて直ちに彼がいる場所にとび込み、素早く鋭い刃物を取り上げると彼を抱いた。その後多くのキスを彼に与え、彼のものとなり、彼が求めている贈り物で彼を満足させた」²⁰⁾と書くことによって、二人が性行為によって結ばれたことを証言している。勿論、これは伝記的事実とは無関係な創作である。
2. ボッカッチョは、そうした恋愛観を持ち続け、初期のころから、性行

為に関する題材を記述することに抵抗を感じておらず、むしろそうした題材を好んで扱った。こうしたエロスの表現こそ、ポッカッチョが一貫して追及したテーマの一つであった。

3. 設定Aはその内容が恋愛評定という形式に縛られていたが、設定Bと設定Cは女性の告白という形式に転換することで、内容が個々に独立してユニークな物語となった。
4. しかし告白体という形式には、設定が有している他人性の効果を完全に生かし切れない特性があることを無視してはなるまい。すなわち告白という行為には、たとえそれが全く赤の他人の告白であろうとも、想像力を用いてそれを記す場合、想像力が優れていればいるほど、強烈な羞恥心が避け難い。本来他人性の最大の効果は、他人の口を借りて語るといふ擬制を用いることで、語る内容に制約を課している羞恥心を緩和させる点にあったのだが、告白という形式ではその効果を完全に発揮し切れないきらいがあった。
5. さらに設定Cでポッカッチョが記した告白には、語り手たちにモデルが存在したために、個々のモデルに関する話題性は期待し得たが、その反面表現上の一層の配慮が必要となり、エロスの表現は希薄とならざるを得なかった。そのために設定Cには、恐らくポッカッチョが期待したほど濃厚なエロスを盛り込むことはできなかつたはずである。
6. しかしそうした欠点を『デカメロン』式額縁Dによって補おうとしたことが、ポッカッチョの創作意欲を刺激したことは想像に難くない。一見極めて有望だと思われた告白形式の制約や、モデルの存在にまつわる不利な点など、設定Cが持っていたさまざまな欠点が『アムート』執筆の過程で明らかになり、『デカメロン』の額縁Dにおいて克服された結果、この作品において絢爛たるたエロスの開花を見ることができたものと思われる。

注

第一章

- 1) 拙稿, 「額縁は『デカメロン』の完成にいかに関与したか」, 桃山学院大学『国際文化論集』35号, 2007年3月所収。
- 2) デ・サンクティスはその『イタリア文学史』において, ボッカッチョが『デカメロン』で聖職者や教会からなるカトリック世界のカリカチュアを描いたとし, また彼の文章が生きたものになるのは, そのコミックで官能的な面においてである, としている。

F. De Sanctis, *Storia della letteratura italiana*, Vol. I, Cap. IX, p. 398, e p. 413, Milano, 1983, Rizzoli (BUR).
- 3) たとえば, G. Padoan, *IL BOCCACCIO LE MUSE IL PARNASO E L'ARNO*, Firenze, 1978, LEO S. OLSCHKI 所収の *MONDO ARISTOCRATICO E MONDO COMUNALE NELL' IDEOLOGIA E NELL'ARTE DI GIOVANNI BOCCACCIO*, pp. 54-59 などを参照。
- 4) イタリア・ルネサンス文学のエロスを論じた研究書の代表的な著作として, ソルボンヌ・ヌーヴェル大学から刊行されている *AU PAYS D'EROS* の2巻 (1986 et 1988) があり, 第一巻でフォルティーニ, タツソ, ポーナ, 第二巻でマンブリアーノ, アリオスト, フリニョーレ・サーレのエロティシズムを論じている。これらと同じシリーズで1975年に刊行された 'Beffa' (悪戯) を扱った巻にもエロティシズムが関係している。しかし近年ローマのサレルノ書店から刊行された, イタリアにおけるもっとも大掛かりなノヴェッラの共同研究, *LA NOVELLA ITALIANA*, Tomo I e II, Roma, 1989, Salerno Editrice の全部で50篇に及ぶ論文のどのタイトルも, エロスやエロティシズムには触れていない。やや進んでいるフランスでさえ, こうしたテーマが扱われ始めてから半世紀しか経っていないことは, まことに驚くべきことだと言わざるを得ない。
- 5) たとえばフロイトの『幻想の未来』は, 宗教が与える永遠の救済という幻想が, 人間のエネルギーを現実の生活の改善から逸脱させていると説く。H. マルクーゼ著, 南博訳, 『エロスの文明』, 東京, 1983, 紀伊国屋書店, 参照。
- 6) 本章注1) の論文の24ページ。

第二章

- 1) B. Migliorini, *Breve storia della lingua italiana*, Firenze, 1966, p. 47.
- 2) 岩倉具忠, 清水純一, 西本晃二, 米川良夫, 『イタリア文学史』, 東京, 1985, 東京大学出版会, 8-22ページ。
- 3) A cura di A. Conte, *IL NOVELLINO*, Roma, 2001, Salerno Editrice, pp. XV-XXVIII の Introduzione 参照。
- 4) Id.
- 5) Id., pp. 5-6 のノヴェッラⅡの『ウル・ノヴェッリーノ』作品2と3を合成して作られている。
- 6) 米山・鳥居, 『イタリア・ノヴェッラの森』, 大阪, 1993, 佐井寺三角社, 58-83ページ所収の「*Libro dei sette savi di Roma* — fiabe italiane の原点 —」。鳥居氏はこの作品にはフランス語からの翻訳とラテン語からの翻訳があり, その内のラテン語からの翻訳の一つで A. Cappelli 版 (1865 Bologna) からの翻訳だと記している。
- 7) 作者不詳, 西村正身訳, 『七賢人物語』, 東京, 1999, 未知谷。
- 8) ペトルス・アルフォンシ著, 伊藤正義訳, 『賢者の教え』, ——中世スペイン説話集——, 東京, 1993, 岩波ブックサービスセンター。
- 9) ペトルス・アルフォンシ著, 西村正身訳, 『知恵の教え』, 東京, 1994, 溪水社。
- 10) 石坂尚武訳, パッサヴァンティ『真の改悛の鑑』——14世紀黒死病時代のドミニコ会士説教集——, (1), (2), (3), 京都, 2000-2001, 同志社大学『人文学』, 第168, 169, 170号。
- 11) おそらくこの問題について, 現在日本で手に入る最もくわしい文献は, B. E. ペリー著, 西村正身訳, 『シンドバードの書の起源』, 東京, 2001年だと思われる。西村氏はその他に同じ未知谷(書店)から, ミカエル・アンドレオポーロス著, 『賢人シュンティパスの書』(2000), ヨハンネス・デ・アルタ・シルウェア著, 『ドロパトスあるいは王と七賢人の物語』(2000)を刊行しておられ, 同氏の一連の業績のおかげで, 日本における西洋説話史の知識が格段に深化したことを認めなければならないだろう。

第三章

- 1) A cura di V. Branca, *TUTTE LE OPERE DI GIOVANNI BOCCACCIO* に Vol. IV として収録されている“*DECAMERON*”, Milano, 1976, ARNOLDO MONDADORI EDITRICE. 以下ではモンダドーリ社のボッカッチョ全集の第4巻としてページ数を付ける。
- 2) G. B. Squarotti, *IL POTERE DELLA PAROLA STUDI SUL «DECAMERON»*, Napoli, 1983, FEDERIGO & ARDIA, pp. 5-63, 所収の論文, *LA «CORNICI» DEL «DECAMERON» O IL MITO DI ROBINSON*.
- 3) 拙稿, 「額縁は『デカメロン』の完成にいかにか寄与したか」, 桃山学院大学『国際文化論集』第35号, 大阪, 2006, 第三章。
- 4) 同上, 21ページ。
- 5) たとえば, デイオネーオがI-4を話し終わった後, 女王のパンピーネアは, 「こういう話を婦人たちの間で話してはならないことを示したいと望んで」フィアンメッタを指名したなどと記されている。モンダドーリ社のボッカッチョ全集第4巻の63ページ。特にデイオネーオに対して, 婦人たちは批判的な態度を示す。
- 6) 特に日替わりで就任する王や女王の存在や, 彼らが語り手を指名する言葉には, あたかも語り手が個別に実在しているかのような錯覚を起こさせる効果がある。
- 7) 『七賢人物語』, 前掲書, 211ページ。
- 8) 『ノヴェッリーノ』では, 15*, 49*, 57, 62*, 99など5篇だが, 解釈の仕方ですら2~3篇増えるかも知れない。
- 9) 『ウル・ノヴェッリーノ』では, 21*, 33*, 84*の3篇
- 10) 『デカメロン』Ⅲ-6, ボッカッチョ全集第4巻, 288ページ。このノヴェッラの二人の男女には, 当時のナポリに実在の貴族のモデルが存在していたらしい。
- 11) 同上, 185ページ。
- 12) たとえば, テーベの砂漠で, 若い娘の地獄に自分の悪魔を追い込むことを教えたため, 娘の要求に悲鳴を上げた修道士の話(Ⅲ-10)など。
- 13) ブランカ博士の『小伝』(モンダドーリ社のボッカッチョ全集第1巻所収) 140ページとその脚注2)によると, ボッカッチョが女性への恨みと憎しみ

をぶちまけているとされるこの『コルバッチョ（醜い鳥）』という作品は、従来は1354-5年ごろ書かれたとされていたが、パドアンが1365年の作だと主張し、今日では後者の説が有力視されている。

第四章

- 1) A cura di Vittore Branca, *TUTTE LE OPERE DI GIOVANNI BOCCACCIO*, Vol. I, Milano, 1967, pp. 61-675, 所収の '*Filocolo*', Libro IV, pp. 384-454. (ボッカッチョ全集第1巻所収の『フィローコロ』)。
- 2) いずれも『デカメロン』第十日目の「寛大・気前の良さ」というテーマのノヴェッラに書き直されている。
- 3) *Filocolo*, op. cit., p. 449. この描写が『デカメロン』X-4でははるかに簡潔になっていて、ポローニヤの騎士はただ胸をさわっただけで、かすかに脈があることに気付いたと記されている。ボッカッチョ全集、第4巻、870ページ。
- 4) モンダドーリ社の全集第1巻所収のV. ブランカ博士の『小伝』（'PROFILO BIOGRAFICO' in *TUTTE LE OPERE* Vol. I, op., cit., p. 43）によると、ボッカッチョが『フィローコロ』を執筆し始めたのは1336年ごろとされているので、ダンテは1321年に死去していたが、ダンテと同世代の清新体派詩人チーノ・ダ・ピストイアは存命中で、しかもナポリに滞在したことがあったので確実に面識があり、その影響を受けている（『小伝』、30ページ以下）。また1304年生まれのパトラルカは早熟で、すでにその名声は高かった。
- 5) ダンテにはドナーティ家出身のジェンマとの間に少なくとも3人以上、おそらく4人の子供がいて、56歳の時ラヴェンナで長女に見取られて死去したらしいとされている。パトラルカは一応聖職者だったが、確実に私生児が一人いてそのために配慮している。
- 6) 西洋中世文学の伝統的な恋愛の主流は、人妻との不倫の恋であった。トリスタンやランスローなどが、その典型的なヒーローであった。最高のトゥルヴァドゥールの一人とされるベルナル・ド・ヴァンタドゥールは、そうした恋愛を实践したことで名高い。ダンテも『地獄篇』第五歌で、パオロとフランチェスカの不倫を描いている。パトラルカの恋もそうした伝統の流れを受け継ぎながら、それを『新生』風の恋に変えている。皮肉にも自らの恋愛

額縁に守られて

の表現に関しては、ダンテへの熱烈な敬意を表明していたボッカッチョがダンテの手法から逸脱したのに対し、ダンテへの敬意に関して曖昧な態度に終始したペトルルカの方が、ダンテ風の表現手法に忠実だったのである。

- 7) アルバ (alba) はプロヴァンス語、フランス語ではオーブ (aube) だが、「暁の歌」などと訳され、ほとんどがプロヴァンス語の作品らしい。
- 8) 聖フランチェスコの弟子たち、フランチェスコ派修道会は、ヤコポーネ・ダ・トーディ (1230-1306) のような宗教詩人を生み、イタリア全土の信仰心を盛り上げた。フィレンツェにもサンタ・クロッチェ教会というフランチェスコ派の拠点があり、異端審問もフランチェスコ派によって行われるほど、市民生活に密着した活動を行っていた。ダンテは『天国篇』第十一歌で、聖トマスを口を通して、聖フランチェスコを賞賛させているが、13世紀の宗教熱が当時のイタリア人の心性に強い影響を及ぼしたことと、そのことが当時のイタリアの文学に反映していることは、否定し難い事実だと思われる。
- 9) ボッカッチョは『フィローコロ』という作品を、フランスの物語『フロワールとブランシュフロール』の主人公たちの名声を高めるために俗語 (イタリア語) で語った小さな本を作るようにと、フィアンメッタから依頼されて書いた、と記している (モンダドーリ版ボッカッチョ全集、第1巻、55-6ページ)。
- 10) いずれの作品でも、恋する女性の死が作品成立のための重大な契機となっている。
- 11) モンダドーリ版ボッカッチョ全集、第1巻、505ページ以下の部分。
- 12) たとえば『新生』の第14章に、婦人たちがベアトリーチェを見てダンテの様子が変わったので怪しみ始めた、などという記述がある。浦一章氏は『ダンテ研究 I - Vita Nuova, 構造と引用 -』 (東京, 1994, 東信堂) において、私たちが無自覚に使っている『新生』というタイトルを慎重に避けている。(同書、0-0. 表題について、4-10ページ参照)。
- 13) プブリウス・オウィディウス・ナーソ (前43-後17) は『アルス・アマトリア』などととも『変身譚』を書いて、ローマから現在のルーマニアに追放された。
- 14) モンダドーリ版ボッカッチョ全集、第一巻、574-586ページ。
- 15) モンダドーリ版ボッカッチョ全集、第二巻およびリッチャルディ版の『イ

タリア文学 歴史とテキスト』のボッカッチョの巻に収録されているが、本稿では脚注が用いられて読み易いので後者を利用している (Giovanni Boccaccio, *DECAMERON FILOCOLO・AMETO・FIAMMETTA*, A cura di Enrico Bianchi・Carlo Salinari・Natalino Sapegno, Milano・Na-poli, 1952, Riccardo Ricciardi Editore, pp. 901-1057.). またガーランド社の中世文学ライブラリーの次の一巻を参照した。Giovanni Boccaccio, *L'Ameto*, translated by Judith Serafini-Sauli, New York & London, 1985, Garland Publishing, Inc.

- 16) 注15) のリッチャルディ版の948-1045ページ。
- 17) 古文書の裏付けがないため、ブランカ博士らによってその存在が疑問視されてはいるが、フィアンメッタは前注のテキストの1013ページで、アクイーノの領主の娘が、ロベルト王に見初められて夫とともにロベルト王の宮廷に入り、ロベルト王に愛されて自分を生んだと語っている。だから、少なくともこの作品が発表されたフィレンツェの読者たちにとって、彼女の若い恋人とはボッカッチョ以外に考えられない。ガーランド本では、102-3 ページ参照。
- 18) この作品でヴィーナスがエミリアの許に残した瀕死の若者は、エミリアに自分の母が父に捨てられたと語るが、そうした経緯はボッカッチョの身の上と一致しており、またボッカッチョはエミリアという名前を『アメート』のニンフみならず、『テセイダ』のヒロインや『デカメロン』の語り手などにも使っているので、伝記作者たちは、ボッカッチョがフィレンツェ帰国後の恋人にこの名前を付けたのではないかと推定している。ガーランド本の156ページの注6)。
- 19) たとえば前注のガーランド本の同ページの注6) でエミリアは, Emiliana dei Tornaquinci で, 注7) でその夫は Giovanni de Nello だと推定されている。
- 20) 本章注15) のリッチャルディ版の1024ページ。思えばボッカッチョも、大変なことを空想してくれたものである。

Under the protection of the *cornice* (frame)

—the flowering of Eros in the *Decameron*—

Yoshiaki YONEYAMA

Chapter I To supplement my opinions on the function of the *cornice* of the *Decameron*, especially on the effects of 'dependence on others' mouth', I will use the frequency of sexual relations in the total work (the percentage of novellas or chapters related to the sexual relations in the total novellas or chapters) and the frequency of important participation (the percentage of novellas and chapters in which sexual relations play a major part).

Chapter II By calculating the frequency (percentages) of sexual relations on the principal works of prose before the *Decameron*, we get the following figures.

<i>Ur-Novellino</i>	8.24 (7/85)	
<i>Novellino</i>	15 (15/100)	
<i>The book of seven sages</i> (Cappelli edition)	46.67 (8/15)	
<i>The book of seven sages</i> (Latin edition)	62.5 (10/16)	
<i>Disciplina clericalis</i> (tr. Nishimura)	12.5 (8/64)	
<i>Disciplina clericalis</i> (tr. Itoh)	19.44 (7/36)	
<i>Lo specchio di vera penitenza</i>	16.33 (8/49)	

From these figures, we can confirm the rarity of sexual relations in *Ur-Novellino* at first, and in other books of nearly the same ages except *The book of seven sages*, which has its origin in the Orient and which has exceptionally a frame of story to bind the novellas.

Chapter III In this chapter, we calculate the frequency of sexual relations in the *Decameron* accurately.

<i>Decameron</i>	37.70 (46/122)
------------------	----------------

To explain the exceptional high frequency in *The book of seven sages*, and the gap from the impression we receive reading both the editions, we closely examine each novella or chapter, and calculate the frequency of important participation, and we get 30.33 (37/122), as for *Decameron*. As for *Cappelli edition*, we get 20 (5/15), which is a rather low figure, but for the *Latin edition*, we get 31.25 (5/16), which is too high figure for our impression.

In the *Decameron*, the sexual relations are often the main themes of the novellas, and at the same time, the motives of the actions of heroes and heroines, which Boccaccio expressed openly. He not only viewed them positively, but also sometimes attributed supreme values to them (as in the cases of II-10 or III-6). Thus we can conclude that Eros is in bloom in the *Decameron*.

Chapter IV In this chapter, we trace the origin of Eros through the process of making the *cornice* (frame), following the three trials. Already in the first trial in *Filocolo*, Boccaccio offered 4 questions related to sexual relations among 13. In the second trial, there was no confession related to sexual relations, but each confession can be related potentially. In the third trial, the potentiality is pursued, but the existence of models of the nymphs and the style of the confession of the ladies inevitably bound to shyness hindered the outcome of the expected density of Eros. But these experiments helped the author to invent a more fit *cornice* of the work to speak about sexual relations more openly in the *Decameron*.